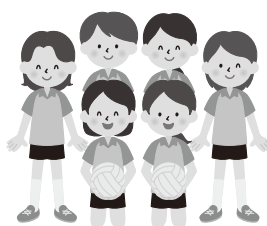




どで簡単につながれる分、人間関係が見た目だけのものになりやすい。しかし私が経験したような「支え合う関係」が本当の友情であり、だれにとっても必要なものではないかと考える。私はこれから、コーチの「独りじゃないぞ」という言葉と、先輩たちのやさしさを忘れず、友情について深く考えながら人とながりを大切にしていきたい。



失った時間と得た経験

坂中学校2年

大西 凌平

僕は昨年、中学校に入學しました。初めて会う他の学校の人や先生がいて、とても緊張しました。けれども、少しずつ他の人と過ご

すのにも慣れてきて、話す機会も増えたことで、新しい友だちもできました。時間はあっという間に経ち、1学期が終わろうとしています。しかし、僕は夏休みまで残り1週間というところで体調不良で学校を欠席してしまいました。そこから1学期が終わるまで、一回も学校に顔を出すことはありませんでした。夏休みに入ってから少し経つ

上部の練習に行き始めて調子も少しずつ良くなり、このまま行けるようになるだろうと思っていました。そして、陸上部の合宿の日になりました。練習に対してしんどいという気持ちも多かったけど、楽しいという気持ちもまだ自分の中にあったような気がします。そして合宿が終わってから再び練習が始まるようになりましたが、また体調不良になって部活動にも行けな

くなくなってしまいました。それから「暇だな」「楽しくないな」などの気持ちをもちながら夏休みを過ごしました。

夏休みも終わり、登校日になりましたが、まだ体調は良くないままでした。僕は教室に行くことができませんでした。体調不良の原因もわからず、いつものように学校へ行くこともできない。僕は悔しい気持ちでいっぱいでした。

それから何日か経ち、僕は母親から「坂中学校には自分のクラス以外に、登校できる別の教室がある」と教えてもらいました。僕はその教室に一回行ってみることにしました。初めて行く教室なので、とても緊張しながら教室のドアを開けました。まず、僕が一番初めに驚いたことは、10人ぐらいの学年が違う先輩たちがその教室にいたことです。僕はそれを見て「悩

みを持っている人たちがこんなにいるんだ」と思いました。僕は先生に案内されるままに、その教室で1日を過ごすことにしてみました。僕はその日からこの教室に通うことにしました。その教室で先輩たちと話したりすることが楽しくなり、その教室にいた同級生ともしやべりました。しかし、以前、教室にいたころや部活動に参加していたころの友だちとはなかなか会うことができませんでした。

ある日いつも通り、クラスとは別の教室で過ごし、下校して家でくつろいでいると、家のインターホンが鳴りました。モニターをのぞいてみると、陸上部の友だちがお見舞いに来てくれました。その友だちとは久しぶりに話しました。久々の友だちとの会話が、楽しかったことはもちろんですが、同時に、また前のように話せることに幸せを

感じました。それから何日か家まで会いに来てくれて、とても楽しい時間を過ごすことができました。そして「教室に行ってみようかな」という勇気をもらうことができました。

それからは、自分のペースで、教室にもだんだんと行けるようになりました。また教室で話すのが楽しいと思う瞬間もできました。あれだけハードルが高かった教室で過ごせることが自分でも不思議でした。僕はなぜだろうかと考えてみました。そして分かったことは、できなくなったことが再びできるようになったからだと思います。友だちと楽しく話すことや、遊ぶこと、部活動の練習、そして授業を教室で受けられること。どれも当たり前のようだけど、当たり前ではありませんでした。僕は2年生になり、毎日、学校へ行くことができています。部

活動の朝練にも参加して、大会にも出場できるまでになりました。だから、周りで日々僕を応援してくれている方々や、あの日、僕に登校の勇気をくれた友だちには感謝の気持ちでいっぱいです。今の生活ができていくことは、当たり前ではないことに、みなさんも気付いてほしいのです。僕はこれから、この当たり前で当たり前ではない日々を続けていけるよう、感謝の気持ちを忘れずに過ごしていきたいと思っています。



先入観と世界を越えて

坂中学校3年

小鷹狩 秀綱

「韓国人と中国人の行動がヤバすぎた」

最近、SNSなどでこのような刺激的な言葉を目にするのが多くなった。

中には、韓国人や中国人のマナーの悪さ、非常識な行動、時には犯罪行為について語られている投稿もある。一方で、日本人の誠実さや礼儀正しさを称賛する意見も多く見かける。しかし、果たして、本当に、韓国人や中国人には悪い人しかいないのだろうか。そして、日本人には誠実な人しかいないのだろうか。私は、そのような単純な考えには疑問を抱く。もし、日本人がみな、誠実に立派ならば、なぜ、日本国内で毎日のように犯罪やトラブルが報道されているのだろうか。逆に、韓国人や中国人にしても、全員が悪意ある人々というのはいさぐさにも乱暴的な決めつけだ。私は、人を国籍や民族で判断するべきではないと思う。人はどこに生まれても、誠実な人もいれば、そうでない人もいます。私が中学2年生の時、ある英語の授業で韓国

人の生徒とオンライン交流をする機会があった。お互いに英語を使い、自分の国の有名な場所や食べ物を紹介するという内容だった。そのとき、私は正直、心の中で不安を抱えていた。友だちとも「韓国人だから日本のことを悪く言うてくるんじゃないか。」「日本と比べて韓国の方が上だと言われるんじゃないか。」と話していた。SNSで見聞きした印象にすっかり影響されていたのだ。だが、実際に韓国の生徒と発表をしあった時、その印象は大きく覆された。私たちの拙い英語の発表に対して、彼らはとても真剣に耳を傾けてくれた。たとえ、発音が間違っていたとしても笑わず、むしろ優しいまなざしで見守ってくれていた。そして、発表が終わった後には、笑顔で、

「Very good!」と声をかけてくれた。中でも、ひとりの韓国人の生徒が言った「I love Japan」という言葉が、強く心に残った。私の世界が一気に広がったように感じた。私は思った。今まで、自分なんて狭い視野で物事を見ていたのだろうか。SNSなどで流れてくる情報は、ときに真実の一部しか伝えていないことがある。極端な事例だけが拡散されやすく、それがまるでその国全体の特徴であるかのよう語られることも多い。しかし、それをそのまま信じてしまつては、自分の世界も、他人の心も、狭めてしまうことになる。この体験を通して私は、誠実さというものの本当の意味を学んだ。それは、国籍や文化、言語の違いに左右されるものではない。目の前の相手にどう向き合うか、

互いに敬意を持てるか、それらが、誠実であるということではないかと思う。人は一度できた先入観を変えることは難しい。だが、実際に心を開いて向き合えば、どんな人とも分かり合える可能性はある。だからこそ、私は「○○人だからこうだ」と決めつけるのではなく、一人一人の行動と言葉に耳を傾けていく姿勢が大切だと思う。これから、日本人としてだけでなく、一人の人間として、他国の人々とも、対等に、誠実に接し、互いに助け合える存在になりたいと思う。そして、自分の言葉や態度が、誰かにとって偏見を打ち破るきっかけになることを願っている。

